

# 機械が心配

井口 昭久



「井口さん。ホルモンの治療を受けると筋肉量が減るね」と同年配のS医師が私に言った。私が「どうやって筋肉量を測ったの?」と聞くと「治療をしている間は試合に勝てなくなつた」と言った。彼は3年前に前立腺癌でホルモン治療と重粒子線の治療を受けていた。治療中に柔道の試合に出たが、いつもは勝てる相手に負けてしまったというのだ。実際に筋肉量を測定したわけではなかったが、筋肉量が減つたためだと彼は思いこんでいた。ホルモン治療が終わると再び勝てるようになったそうである。

私も千葉県にある放射線医学研究所病院で日通うことはできないので入院した。久しぶりの休暇であった。仕事を抱えて乗り込んだ。体はいたって元気であった。病院の食事は美味しかった。

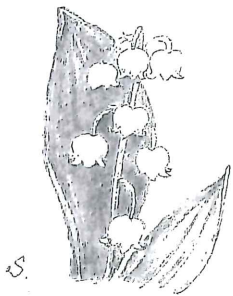
しかし朝から病室にいと「病気になるしう」であった。看護師も「健康に悪いですよ」と言った。「病室にいても起床したらバジャマを脱いで散歩しなさい」ということだった。2週目に入った。7回目の放射線照射の予定の日の朝、主治医が病室へ突然現れた。「申し訳ありませんが、昨夜、機械のヒューズが飛んでしまい、今日は稼働できません」と言った。私への放射線照射は週に4回行われた。計12回の放射線治療を行うには、入院日数はのべ22日になるはずであった。

私は毎日忙しい。講義や外来患者の診療などで日程には全く余裕がない生活を送っている。この入院のための3週間の休暇の前日まで患者を診て退院後の次の日には患者の予約が入っていた。3週間の穴うめのために予約

重粒子線の治療を受けた。私も前立腺がんの患者である。前立腺がんの治療は選択肢が多い。手術が最も多く行われている方法であるが、その他にもホルモン療法や放射線療法がある。放射線療法には陽子線や重粒子線による治療法も開発されていて良好な成績が出るようになってきた。

ホルモン療法だけで私の前立腺がんはほとんど制圧されているのだが、将来ホルモンが効かなくなる場合があるので重粒子線の治療を受けることになった。

1回の照射時間は20分程度で済むが12回の治療が必要であった。名古屋から千葉まで毎



表はぎつしりと詰まっていた。そこへ「もう1日入院を延ばしてもらえませんか?」と主治医に言われて私は困った。私は日常業務と治療の選択を迫られた。結局、一旦は退院して1週間後に再び千葉へ行つて1度だけの照射を受けることになった。

がん治療が日常生活に組み込まれる時代になった。前述のS先生のように治療中に柔道の試合に出る人も現れてきた。

退院時に「何か心配することはありますか?」と看護師に聞かれた。私は「機械のことが心配です」と答えた。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)